

空襲による恐怖の一夜

丸岡 一志

東中野一丁目

私は東中野で戦災をうけた。空襲の怖さと、戦争の悲惨さを知ったのは、中学三年の時、遊びたい盛り年ごろだった。ただ、お国のためにと勤労働員の一員として、昭和十九年より江東区亀戸の精工舎工場で働いた。

今でも脳裏に焼きついている恐怖、忘れることのできない情景は、昭和二〇年三月九日夜半から十日未明にかけての下町での大空襲だった。アメリカのB29重爆撃機による焼夷弾と爆弾が一夜にして町を灰燼と化し、大多数の人びとを焼き殺してしまった凄惨な事実をまのあたりに見た時、腰が抜けて歩けないほどのショックを受けた。

三月から四月にかけて、東京の空襲が連日続いていた。そして五月二五日夜、警戒警報のサイレンが無気味に鳴ると同時に空襲警報となった。私は今晩はいつもの空襲とは大分様子が違う気がした。と言うのはB29が低空を飛び、探照灯が数多く空を左右に照らし出していたからだ。そのうち照明弾が落とされ、花火のようにパツと散り、周囲一面が昼間のように明るくなり、

そのあとドカーンと大きな音がした。それも割と近い場所で発生しているようなので家から外に出てまわりをみると、焼夷弾による火災で真っ赤に染まっていた。

父もない我が家では、病身の母と妹二人計四人で、身の廻りの小物を持って隣家の地下防空壕に入った。まわりを見ると女性と子供ばかりで大人の男性は一人もいなかった。地上からポンポンと高射砲が激しく撃ち上げられ、そのうちヒュー、ザー、ザー、と焼夷弾の落ちる音が連続的に無気味に聞こえてきた。私はふと三月十日、下町での光景が脳裏をよぎった。いつまでもこのまま壕にいと殺されると思い、中に避難していた人達を一刻も早く連れて逃げることにした。

壕を出て道路上に立つと、つい先程までのくらやみは消えて、空は夕焼け雲のように赤く、まわりは昼間のように明るく、道は右往左往する人でいっぱいになかで、どこに避難したらよいかわからぬまま、大通りを東中野駅の方に向かってみんな歩いてきた。途中何度も焼夷弾が落ち、空から火の粉が舞うのがみえ、

煙が多く、鼻も目も痛く、大きな音で立ち止まる人が増え、だんだんバラバラになってしまふ。結局、駅についた時は私達四人と後二、三人が一緒だった。多数の人が駅にいた。神田川に沿って避難する人、私達は線路に沿って中野駅の方角に歩きだした。妹の名前を呼びあつて母の手を取つて、ただ人の流れについていった。四人が足をとめたのは、すでに焼土となり破壊された場所（現在の明大付属中野高校）だった。そのうち風が出てきて、だんだん強くなり、焼けた町の火を激しく巻きあげて、私達のいる場所へ情け容赦なく吹き荒れるのでみんな喉が^{のど}が渴き、煙で呼吸が苦しく、泣き叫ぶ人も多く、私はヤカンに水を入れて持っていたので上手に利用して助かった。そんな時、大人の大きな声で「いま氷川町の升屋酒店が焼けてるよー」と叫んでいた。父が懇意にしていた酒店だったのでいっぺんに氣落ちした。周りの人達は一睡もせず夜の明けるのを待った。

やがて東の空が白んできて、忌まわしかった一夜は明けた。いつまでもここにいてもしようがないと思ひ、とりあえず家に帰ることとした。途中燃えつきてしまった家々の黒い残がいから白や灰色の煙がくすぶっていた。幸にして死人を見ることなく、町内に入るに従つて、昨日までのあの町並はいまは跡形もなく完全に焼け野原となり、時々くすぶっている物体が随所にあつた。

家の焼け跡に行つてみるとそこに父が立っていた。どうやっ

て田舎から帰つてきたのか不思議な想いがした。我が家は門柱二本と真つ黒に焼けたシユロの木が印象として残つた。

隣家の壕も上部が完全に焼け落ちていた。早く逃げてよかつたつづくと思つた。陽が高くなるにつれて、一緒に避難した人びとが、みんな目を赤くし、髪を乱し、上着やモンペは焼けこげ、無言で無事帰つてきた。

私達一家は数日後、罹災証明書をもらつて、父の故郷へ家族全員で行つた。

戦争―これほどむごいことはない。私にとって、戦火をくぐつた思い出は、一生忘れることができない。